

愛媛新報 2007-11-27

2007年(平成19年)11月27日 火曜日

遺族「早く日本に連れて帰りたい」

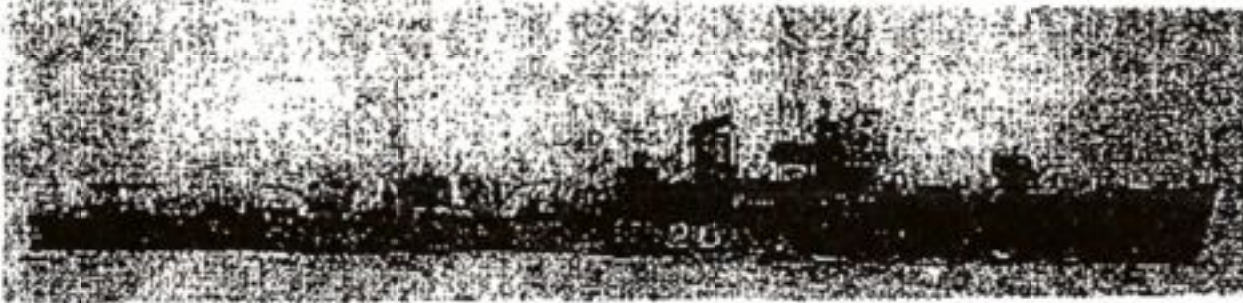
インドネシア

インドネシアスマラウエシ島(旧セレベス島)南部のマカッサル湾に、日本人戦没者の遺骨が散乱している。第二次大戦中に撃沈された艦艇の乗員たちの遺骨で、鉄材などを売るために船体を切断した地元住民らが、その半量放棄しているためだという。艦艇の原形は崩れ、遺骨の散乱に担当が掛かっており、遺族は早く日本に連れて帰りたいと訴える。

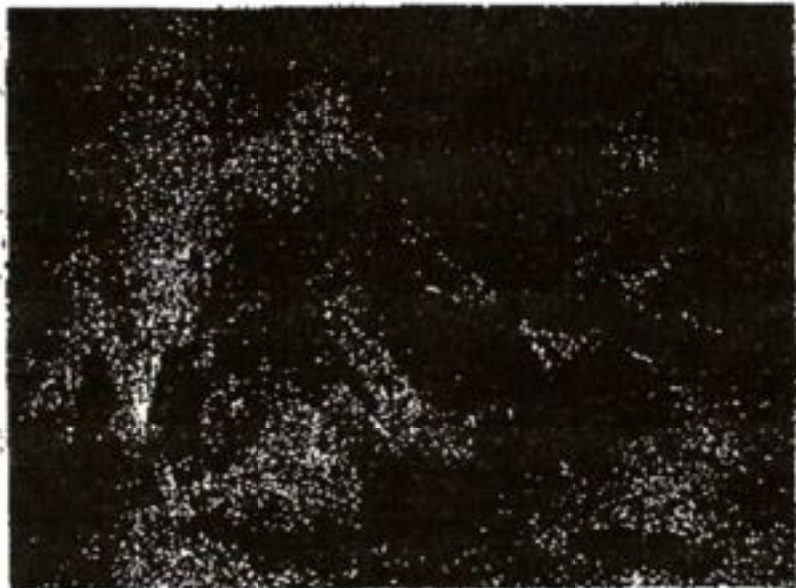
同湾では戦争当期の一九四五年三月二十八日、四号、現地の会社に調査マカッサル湾の西約五、の橋上で、兵士らを輸送中の「第十一号掃海艇」(六三〇ト、全長七一・五メートル)が米軍機B24の爆撃を受け沈没。乗員三百人のうち、生存者は八十一人、二百十九人は海に没したとされる。「船の残骸(さんがい)と遺骨を発見した」。元

地元住民 鉄材売買で船体切断

戦没者の遺骨散乱



沈没船と同型の掃海艇(元国際協力機構シニア海外ボランティアの田原俊生氏提供)



国際協力機構(ICA)の専門家としてマカッサル駐在経験のある藤田清之さん(神戸市川島在住)の元に二〇〇五年末、知らせが届いた。二十四歳で戦死した、妻の池田二郎さん(愛媛県出身)を失った元中学校教諭野原英代さん(六〇)「福西県在住」らとインドネシア・マカッサル湾の海面上に散乱する遺骨(元国際協力機構専門家の藤田俊生氏提供)

藤田さんは毎月、厚生労働省に、第十一号掃海艇の調査報告書や引き上げられた鉄材のトレーナーなどを提出し、正式な調査と遺骨収容を求めた。厚労省は昨年八月に調査決定を決定。「〇七年中に現場を派遣し、インドネシア政府と国際協力機構(ICA)が調査する」としているが、実現のめどははっきりしない。藤田さんは「いたずらに時間が経過して、骨に見えぬ遺族がなごり」